

相 中 時 代 の 思 い 出 (※1)中第 16 回卒 渡 辺 宗 綱 (※2)

小生母校より 1 年後れの明治 32 年生れ、現在 79 才です。大正 2 年 4 月相中入学、大正 7 年 3 月第 16 回卒業です。今ここに 65 年以前に遡りその原点に立って当時を顧み、在学 5 ヶ年間における出来事や恩師の思い出、学校生活の数々についてなるべく具体的に述べたい次第です。

入学試験—大正 2 年 3 月待望の中学校を受験し 130 名の合格者が発表になった。旧中村町より約半数、郡内近隣の町村より 2、3 名から 4、5 名づつ、浪江や富岡の双葉方面から十数名合格した。いよいよ 1 年生となり、学帽に中学の徽章をつけ白線 1 本を巻き、筒袖和服に袴をはいて登校、ズックのカバンを右肩から左にさげ一里の道を徒歩通学した。

桜井賢三校長先生から質実剛健の校風について訓話をきいた。頭髪を大工刈りにして黒い鼻髭が立派に見えたのが印象的だった。

南校舎に地歴の特別教室があった。階段になっていて後の方が段々高くなっている。1 年生には珍らしいのでキョロキョロしていた。同準備室には地図や掛図や実物標本類が一杯あった。先生が見えて氏名点呼出席簿をつけてから、「俺<sup>わし</sup>は成田坊主（三千郎 (※3) 先生）といふ。第 1 回卒業生から教えている本校の主<sup>ぬし</sup>じゃ。何でも聞きたいことはきいてくれ。卒業すれば君をつけて呼ぶが、生徒の時は呼び捨てだよ」などとおどかされた。卒業生からは最高に信頼されている豪傑の先生であった。

3 月の学年試験で各学年の進級生と落第生が掲示発表された。成績順で驚いてしまった。1 年の落第は十数名あった。この順で落ちるのでは卒業までに半減してしまう。

紙面の都合で 3 年生の思い出に飛ぶ。3 年生は 6 月 1 日から初めて小倉の霜降りの洋服着用である。控所の入口に 5 年生が両側に並んで首実検をして通すので、誰もがやじり飛ばされ泣き面をしてしまう。これが年中行事になっている。

4 年生も飛ばして 5 年生の思い出を書いてみよう。5 年に進級して校旗々手を命ぜられた。外に誘導生、護衛生と計 5 名である。行事や式典や運動会等には出場して全校職員生徒から敬礼を受けた。

吉成新太郎 (※4) 先生は国語漢文の担任であった。教科書なしで暗誦して教授せられたので生徒は実力の深さに驚嘆して心服した。論語孟子などの課外授業も勿論空で教えられた。

結び—原稿制限のため学年を飛ばし寒稽古や武道大会、兎狩や運動会等の思い出も割愛した。

烏兎忽々 5 年の星霜が夢の間にすぎ 14 才の少年も 19 才の青年になっていた。65 名卒業した。今ここに母校の 80 周年の盛典を迎えるに当って幸に健在で祝福出来る者は 3 分の 1 の 20 余名であろう。

(※1) 「相中相高八十年」1978(昭和 53)年 5 月 7 日発行、「思い出の記」より。

(※2) 大正 7 (1918) 年卒、八幡出身。

(※3) 相中教諭：明治 31 (1898) 年～大正 11 (1922) 年。

(※4) 相中教諭兼舎監 明治 38 (1905) 年～大正 7 (1918) 年、国語・漢文・歴史。校歌作詞者。